

身体障害者の立場から

日本障害者協議会 太田修平

介護する、されるの關係のしんどさ

- ・身体障害の場合、障害が重ければ重いほど、自分自身のことを他者からの介護に依拠しなければ生活が成り立たない。
- ・介護するという行為はとても大変で、それが毎日となれば、介護者の精神的肉体的ストレスは相当大きなものとなる。
- ・一方介護される側もなるべく自分の思い通りの介護を受けたいがため、要求が高くなってくる。

ゆとりがなくなると理性を失う

- ・人は自分自身にゆとりがあれば他者への思いやりを持てるが、ゆとりがなくなると、思いやりどころか、わずらわしい存在となってくる。
- ・私自身、介護が大変になってきた中学ぐらいの頃から親子関係がぎくしゃくし始め、母も私も双方が顔も見たくない時があった。

家族は感情をもろに出す、その時弱い立場の者は…

- ・家族は遠慮のいらぬ関係と認識されている場合が多く、しんどくなると感情がむき出しとなる。険悪な雰囲気になった時、これ以上言い合いをしてると、力づくで来るような気配を察知し、納得できないまま介護する側の意に沿うような行動や態度を取らざるを得ない場合が多い。虐待を受けても他人にはなかなか言えないのが実情。

施設では言葉の暴力を含め力で抑え込むムード

- ・施設の職員は、利用者を支配下に置き、言葉の暴力を浴びせるなど、力によって職員側の思い通りにさせている場合が多い。(職員はなかなか意識化できない) その延長線上に暴力がある。

訴えても行き場がない場合は、黙り込む

- ・施設で利用者が職員から暴力を受けたとしても、訴えても他に行き場がないので、言いたせないのが現状。

外部、他者が関われるしくみを

- ・在宅、施設を問わず、介護する人とされる人の関係に終始するのではなく、地域社会のいろいろな人たち、組織が関わっていくことが重要。

介護を一部の人に背負わせるのではなく

- ・介護を社会化していき、ひとりの負担を軽くし、介護する人がストレスをためることなく、新鮮な気持ちで介護ができるような制度をつくっていくことがより重要。また介護を受ける人が、介護の場や、介護する人を選択できるぐらいの制度的基盤が求められる。